



2023 年度

アンコール遺跡整備公団

インターンシップ報告書

公立小松大学/金沢大学

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

2024 年 2 月





写真1. アンコール・ワット寺院前での植樹作業後に（右から二人目から：戸田すみれ、佐藤さや花、坪内美南、石川怜奈、宮下千佳、相原音々花、2023年9月12日）。

写真2. アプサラ公団水管理部門で担当職員から業務内容の説明を受ける（2023年9月6日）。

写真3. 担当職員たちとの業務後のディスカッション（2023年9月11日）。

写真4. とりまとめた業務報告書の内容を担当職員に確認してもらう（2023年9月14日）。





写真1. 北バライの中央にあるニャック・ポアン寺院の見学 (2023年9月6日).

写真2. アンコール・ワット寺院の第一回廊でクメール神話について学ぶ (2023年9月7日).

写真3. アンコール・ワット寺院の西参道で記念写真 (2023年9月7日).

写真4. 西バライの植林地で担当職員の説明をうける (2023年9月8日).

写真5. 西バライの中央にある西メボンの修復現場へ船で向かう (2023年9月8日).

写真6. 修復が終わったばかりのアンコール・トムのタケオ門にて (2023年9月8日)



写真 1. アンコール世界遺産での植林計画の説明を担当職員にうける (2023年9月12日).

写真 2. タケオ育苗地でのポット苗作り (2023年9月12日).

写真 3. アンコール植物公園の見学 (2023年9月12日).

写真 4. カンボジアの古代集落ロヴィア村で担当職員の説明をうける (2023年9月13日).

写真 5. クメール建築の専門家シム・ブントゥーンさんとクメール家屋前で (2023年9月13日).

写真 6. ブントゥーンさんとの面談 (2023年9月13日).

写真 7. 最終日の面談試験 (2023年9月15日).



写真 1. アプサラ公団ハン・プウ事務局長との夕食 (2023 年 9 月 6 日)

写真 2. 行きつけのカフェでの夕食 (2023 年 9 月 13 日).

写真 3. 休日に訪れたロレイ寺院 (2023 年 9 月 9 日).

写真 4. トンレサップ湖の浸水林 (2023 年 9 月 9 日).

写真 5. アンコール植物公園での修了式 (2023 年 9 月 15 日).

写真 6. アプサラ公団のイトット・チャンドアラット副事務局長と修了式後に (2023 年 9 月 15 日).

写真 7. お世話になった公団職員のみなさんと (2023 年 9 月 15 日).

2023 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

目 次

1. Internship Programme 2023: Remarks from the Deputy Director-General	Yit Chandaroat . . .	1
2. 2023 年度インターンシップの概要と成果, 今後の課題	木村 誠・塚脇真二 . . .	2
3. インターンシップ参加学生の報告		
1) インターンシップに参加して	戸田すみれ . . .	7
2) アンコールインターンシップを終えて	石川怜奈 . . .	10
3) 初めての東南アジア カンボジアでの学び	相原音々花 . . .	13
4) インターンシップを終えて	佐藤さや花 . . .	17
5) カンボジアで学んだ大切なこと	宮下千佳 . . .	21
6) アプサラ公団でのインターンシップを終えて	坪内美南 . . .	25
4. 資料: 2023 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要	. . .	29
5. 資料: インターンシップでの業務地とおもな訪問地	. . .	32

図版 1 : 2023 年度インターンシッププログラムの参加者と室内業務

図版 2 : アンコール世界遺産公園での 1 週目の現場業務

図版 3 : アンコール世界遺産公園での 2 週目の現場業務

図版 4 : インターンシップでの休日とプログラムの修了式

1 . Internship Programme 2023: Remarks from the Deputy Director-General

APSARA National Authority
Deputy Director-General, YIT Chandaroat

More than a decade of collaboration between the APSARA National Authority and Kanazawa University since 2010 and then Komatsu University (former Komatsu College) since 2016, in the name of the APSARA National Authority and myself as Deputy Director General in charge of water, forest, infrastructure, agriculture, community, environment and land management, I strongly appreciate and evaluate positively the result of an annual exchanges by both parties.

It is such a massive opportunity for both Cambodian and Japanese officers and students to share their knowledge, experiences and the best practices in natural resources and environment management in the framework of the conservation and sustainable development of heritage sites.

Recently, even though the duration of internship of Japanese students in some technical departments of the APSARA National Authority is short, two weeks only, through their observation, investigation and practice on the ground, I actually found their sincereness and strong commitment to adapt to the social and cultural environment and quickly gain all the main points presented by our technical officers and experts.

Finally, I eventually continue to support and strengthen the above cooperation in order to build the capacity of our students and staff who are future leaders of our individual institution and county. The APSARA National Authority is looking forward to meeting all of you from Kanazawa University and Komatsu University again soon.

2. 2023年度インターンシップの概要と成果、今後の課題

公立小松大学国際文化交流学部 准教授 木村 誠
金沢大学環日本海域環境研究センター 教授 塚脇真二

2010年度に金沢大学で始まったアンコール遺跡整備公団（略称：アプサラ公団）での学生インターンシップは、今年度で11回目を迎えた。本インターンシップは2018年度から公立小松大学に実施母体を移しており、現体制としては3回目の実施となる。

2019年12月から始まった新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延により、2020年度から2022年度については中止せざるを得なかったため、今回はじつに4年ぶりの実施となった。このような長期間のブランクがあったにもかかわらず、インターンシップ学生を快く受け入れてくださったアンコール遺跡整備公団（以下、アプサラ公団）総裁 Hang Peou 氏をはじめ、公団のみなさまに感謝の意をまず表したい。

このインターンシップに参加した学生は、今回を含めて94名になる。これだけ多くの学生が参加する海外派遣プログラムが、これまで事故もなくすべて無事に終了できたのは、アプサラ公団の職員の細やかな支援と熱心なご指導のおかげである。また、公立小松大学の山本博学長、金沢大学環日本海域環境研究センター長尾誠也センター長、インターンシップ実施委員会の先生方、その他学内外の関係のみなさまの変わらぬご理解とお力添えにも深謝申し上げたい。さらに、在カンボジア日本国大使館ならびに在シエムリアップ日本国領事事務所には、安全な渡航・滞在のための情報提供をいただくとともに、在カンボジア日本大使館の「日カンボジア友好70周年記念事業」及び外務省の「日ASEAN友好協力50周年記念事業」に認定いただいた。これらの関係の皆様にも感謝の意を表したい。

今年度の公立小松大学からの参加学生は、国際文化交流学部の4年生2名、3年生2名、2年生1名の5名であり、金沢大学からの参加学生は、人間社会学域地域創造学類の3年生1名である（写真1）。引率教員としては、筆者らが全行程随同行して安全管理と現地指導を行った。なお、前回までのインターンシップでは、過去に本インターンシップに参加した学生がチューターとして参加したが、4年ぶりの実施と



写真1. 公団本部での始業式。

なった今回は、過去の参加学生からチューター候補を探すことが困難であった。そのため、今回は参加学生の中から、公立小松大学国際文化交流学部4年の坪内美南さんにリーダーを務めていただくこととした。なお、このインターンシップの準備、参加学生の募集や選抜、インターンシップの実施などにかかる日程などについては巻末の資料を参照されたい。

学生たちの受け入れ先は、アプサラ公団の水資源・森林・インフラ部門である。学生たちは2週間のインターンシップ期間中、同部門長である Phoeurn Sokhim 氏と彼のチームによる指導を受けることができた。参加学生は、2つのグループに分かれて業務に従事したが、両グループが合同で業務を行うことがほとんどであり、全学生がすべての業務を経験することができた。また、業務期間中、植物動態学を専門とする埼玉大学の荒木祐二准教授からも現地で指導を受ける機会に恵まれた。現地調査で多忙な中、参加学生に貴重な助言をいただいた荒木准教授には心からの謝意を表したい。また、緊張感のある業務の中、荒木准教授の穏やかな人柄に助けられた学生も多かったことと思う。

インターンシップ期間中、参加学生は公団総裁の Hang Peou 氏から夕食にご招待いただき、温かい激励のお言葉をいただいた。Hang 氏の挨拶の中で、このインターンシップは、参加学生だけでなく、指導する側の公団職員にとっても貴重な経験となること、また、参加学生からの遺跡整備に関する提案は公団にとって価値がある、とのメッセージをいただいた。このインターンシップは公団職員の通常の業務時間の中で行われるため、学生指導と通常業務の両立の負担をお願いすることになる。総裁のこの言葉は、公団側が学生の受入に価値を感じてくださっていることを示すものであり、大変ありがたく、また、嬉しく感じた。また、インターンシップの始業式の前日には、在シエムリアップ日本国領事事務所を訪問し、川口正樹所長から、カンボジアの歴史、および日本とカンボジアの交流の歴史について講義を受けることができた。現地領事事務所から直接支援のお言葉をいただいたことは、現地での生活、とくに安全管理の面で学生たちに安心感を与えられたのではないかと思う。川口所長をはじめ、領事事務所関係のみなさまに深謝申し上げたい。業務最終日には、学生たちの受入責任者である公団副総裁 Yit Chandaroat 氏から修了証書の授与が行われた（写真2）。その後、Yit 副総裁をはじめ、お世話になった公団職員らがバーベキューパーティーを開催してくださった。最終試験に無事合格し、修了証書を手にした時の学生たちの嬉しそうな表情と、パーティーでの幸せそうなようすは今でも鮮明に記憶に残っている。学生たちの業務のようすや、彼女らが現地で学んだことについては、それぞれの報告書にいきいきと記されている通りである。



写真2. 修了証書の授与式。

4年ぶりのインターンシップの実施に、担当教員として不安が無かったわけではなかった。業務地であり、学生たちが滞在するシエムリアップ州は、アンコール世界遺産を訪れる観光客からの観光収入への依存が高い。コロナ禍により長期間観光客が途絶えたこの町が、この3年間でどのように変化したのか、安全管理の面でもこの点は決して無視できる問題ではなかった。そのため、筆者らは、本インターンシップの再開を検討するにあたり、それぞれに

現地を事前に訪問した。業務地および学生たちの現地での生活圏の状況を実際に訪れて確認し、治安の悪化やホテルやレストランの営業状況など、生活に支障が出るような変化がないことを入念に確認した。それを踏まえての公団との綿密な意見交換、インターンシップ実施委員会での議論を行った上で再開の判断に至ることができた。

今回の参加学生は、いずれもコロナ禍の中での大学生活を送ってきた学生たちである。彼らは、授業のオンライン化、マスクの常時着用、サークル活動などの学内外イベントの制限など、不自由の多い生活を余儀なくされてきた。自発的、積極的に関心のある活動に参加して大学生活を謳歌するというよりも、大学の指示や許可の範囲内で、どちらかという受け身の生活を送ることが多かったと考えられる。学生間の交流がコロナ前と比べて少なく、多くの制限の中で大学生活を送ってきた学生たちが、積極性を持ってインターンシップに従事できるかどうか、また、海外インターンシップへの動機づけや興味関心にコロナ前の参加学生と比べて大きな変化がないかといった点については、担当教員として若干の危惧があった。

幸いにもこの心配の大部分は杞憂に終わった。理解が不足する部分を互いに教えあい、積極的に議論をするようす、そして楽しそうに食事をし、休日やフリータイムに思いっきり楽しむようすは、コロナ禍の存在を忘れさせるほどであった。その一方で、学生たちは現地の生活に慣れてきても、決して安全面で心配になるような行動は取らなかった。この点は、リーダーの坪内さんの献身的な気配りと働きに負うところが大きいと感じる。初めてのカンボジア滞在でリーダーの役割を担ったことで、不自由を感じることもあったかもしれないが、立派にリーダーの役割を務めてくれた坪内さんに感謝したい。

今年度も無事に、そして学生達にとってはたくさんの学びとかけがえのないたくさんの思い出をお土産にしてプログラムを終了することができた。その一方で、本プログラムが抱える課題も明らかになってきた。学生たちは、それぞれの報告書に書かれているように、現地で多くの新しい経験をし、自分自身の課題についての気づきを得て帰国している。しかし、このインターンシップでの学びが帰国後の大学での学修あるいは研究活動に活かされているとはいいがたいのではないかと感じている。これは、学生側ではなく、プログラムを構築する大学側の課題であると思われる。

現地での指導にあたってくれた公団職員は、多忙な業務の中、決して手を抜かずに指導をしてくださった。ある程度の事前研修を行ったとはいえ、世界遺産の維持管理については素人である参加学生に対し、何度でも、時には地面やホワイトボードに絵をかきながら、繰り返し説明をしてくださった。そして、説明のレベルを安易に落とすこともしなかった。彼らのこの姿勢が



写真3. 最終試験.

らは、学生たちに正しく理解して帰国してもらいたい、そしてそれを将来に活かしてもらいたい、という強い願いが感じられた（写真 3）。業務期間中、学生たちはその期待に応えるよう、十分努力していたと感じる。しかし、帰国後にその学びをさらに発展させる機会が乏しいことはきわめてもったいないことであるとも感じる。このインターンシップを楽しかった思い出として終わらせないために、各大学のカリキュラムの特性なども考慮したプログラム内容の大幅な見直しも視野に入れて検討する必要があるだろう。

最後に、本事業への本学学生の参加のためにご尽力をいただいた関係諸氏に改めて深謝申し上げるとともに、本事業への変わらぬご支援を心からお願い申し上げます次第である。

3. インターンシップ参加学生の報告

1) インターンシップに参加して

公立小松大学国際文化交流学部 4年 戸田すみれ (グループ 2)

本インターンシップは3年ぶりに再開された。私が新入生として大学に入学した2019年、本インターンシップが新型コロナウイルスの影響で中止になり参加する機会を逃していた。そして今年度、私が4年生に進級したタイミングで再開されたこと、そして運良く本インターンシップに参加できたことを嬉しく思う。

待ち望んでいたインターンシップの始まりは大雨だった。日本ではなかなか見られない大雨にこれから始まるインターンシップがどうなるのか不安になったが、翌日以降は晴れ間も多く杞憂に過ぎなかった。インターンシップの1日の業務は、午前に現場へ出向き現地のスタッフから説明を受け、午後はオフィスに戻り午前中のフィードバックや報告書の作成が主であった。カンボジアの気温は暑く、制服は日焼けと虫刺され対策で長袖なため、汗が止まらず体力的に辛い時期もあった。



写真1. クメールカネロニ.

私がこのインターンシップ中に特に気に入っていたのは移動の時間である。車やバイクから見えるシェムリアップの街並みは想像していたよりも賑やかだった。犬や牛が歩いたり人々が談笑していたり、日本と部分的には重なりながらも異なる風景が多く移動中は退屈なく過ごすことができた。バイクに乗ると車よりも風景を身近に感じることができた。風を感じることはもちろん、現地の匂いや人々の話し声やエンジンの音など肌で感じることはできたのは良い経験だと感じた。

現地で食べた料理で一番印象に残ったのはクメールカネロニである。パブストリートという飲食街にある **Tiger** という店で食べることができたこの料理は、見た目はグラタンのような見た目だが少し甘くスパイスも効いていて大変美味しかった。同様に現地で飲むシェイクも美味しく、滞在中の料理はすべて楽しむことができた (写真1, 2)。

休日はトンレサップ湖やシェムリアップ市内をメンバーと散策した。トンレサップ湖に向かう道中では 2



写真2. 市内の橋.

階建ての船に乗り、超高床式の住居を見た。最初は船の 2 階から、その次に 1 階に降りて高床式の住居を見た。2 階から見ている時は住人の生活空間をより近くに感じることができ、1 階に降りると住居自体の高さを感じることができた。

トンレサップ湖に出た時、湖の上で船に乗りながら商売をしている女性に英語で話しかけられた。彼女は英語を観光客から習い勉強したそうで、英語は話せるが書くことはできないと言っていた。現在、トンレサップ湖近くの学校では英語を教えているクラスが一つだけ存在していると教えてくれた。話を聞いているうちに、子供たちのためにノート・鉛筆を買ってくれないかとお願ひされたが丁重にお断りした。こういう場面に立ち会い物を買わないことが薄情というわけではないと理解しながらも、スッキリしない気持ちを抱いた。

アンコール遺跡群について日々勉強していく中で、「水」が重要な要素だということを理解した。砂から構成されている寺院の地盤を固めるには水が必要であるため、寺院の周辺には必ず水が存在しており、バライと呼ばれる貯水池から水路を通じて水を流すシステムも存在していた。アンコール遺跡群では水が水路や地下を回って循環しており、一つの生き物のように私は感じた。

北バライはジャヤーヴァラマン 7 世によって作られ、東西に 3.6 km、南北に 930 m、貯水量約 5,000,000 m³の大きさを持つ貯水池である。約 500 年間は水が入っていない状態だったが、2008 年から水を入れ始め、今はアンコールトムやアンコールワットの地盤を安定させるための重要な役割を担っている。バライと呼ばれる貯水池は東西南北に 1 つずつ計 4 つあり、バライと呼ばれる所以は池の中央にメボンと呼ばれる寺院が存在していることにある。そのため、バライの水はメボンの地盤を固め補強する役割もある。北バライのメボンはニャック・ポアンと呼ばれる寺院で、中央祠堂の周りには水が溜まっており、その周りにはさらに 4 つの池がある。これらの 4 つの池には象、人、虎、馬の像がそれぞれあり、中央の池からそれぞれの像の口を通して水が供給される。4 つの像はそれぞれ象 - 水、人 - 地、虎 - 炎、馬 - 風のように 4 つのエレメントを象徴している。



写真 3. 馬の像を見学する。

私たちが見学した時期は雨季だったためはっきりとその姿を確認することは出来なかったが、現地スタッフの方々のご厚意で立ち入り禁止になっていた馬の像だけは見る事ができた（写真 3）。また、中央の池の中には神馬ヴァラーハの像を見ることが出来る。雨季のため頭部しかみることは出来なかったが、シェムリアップの空港にもこの像があったため全体像は見る事ができた。この馬は言い伝えに存在する馬で神様の化身である。ニャック・ポアンは病院としての機能を果たしていたようで、上から見ると中央祠堂と 4 つの池

で十字架のように見えた。

我々がニャック・ポアンを見学している際、日本からの団体ツアーの人々がガイドを先頭にしながら近づいてきた。そのツアーガイドによるニャック・ポアンの説明は我々が現地スタッフから聞いた説明とは内容が異なっている部分が存在していた。アンコール遺跡群は人気の高い世界遺産であるためツアーも多い。各ツアーに同行するガイドの質をどう高めていくかは今後の課題だと感じた（写真4）。

私がこのインターンシップを終えて今後活かしていきたいと考えていることが二つある。一つ目は日本人としての自覚を持つことである。私は現地で日本人という肩書きへの責任を感じた。インターンシップ中に意見を求められる場面では、その質問が日本人の我々にされているような感覚が強かった。日本がカンボジアに比べて発展しているからこそ我々の意見を参考にしようとしてくれているのだと思う。それに応えることのできない自分がとても不甲斐なかった。日本人としての自覚も持ちつつ、国際社会に出た際により柔軟な考え方やその土地の文化や背景なども考慮しながら意見できる人間になりたい。

そして二つ目は、学ぶ姿勢を低くすることである。今回お世話になったスタッフの方たちは無知な我々のことを快く受け入れるとともに、我々の意見を真剣に聞いてくれた。そのような姿のスタッフたちは物事の向き合い方がとても素敵だった。学ぶ姿勢の低さは物事の捉え方や生活態度にも影響すると思えたので、これからの生活に活かしていきたい（写真5）。

今回インターンシップに参加して、非常に貴重な経験ができた2週間だったと感じる。カンボジアのことが大好きになったので、また必ず行きたいと思う。



写真4. ニャック・ポアン.



写真5. 木に座って.

2) アンコールインターンシップを終えて

公立小松大学国際文化交流学部 3年 石川怜奈 (グループ 1)

今回、9月4日から17日までの約2週間、アンコール遺跡整備公団 (APSARA 公団) のインターンシップに参加させていただきました。このプログラムは留学ではなく、就業体験です。私はその点に強く惹かれ、留学に行くのとはまた違った経験ができるのではないかと考え、参加を希望しました。

私がインターンシップ参加にあたり、一番心配していたのが英語です。私は外国に行ったことがないどころか飛行機に乗ったことすらなく、一緒に行くメンバーはみんな海外経験があったので、自分がしっかり業務についていけるのか不安で仕方ありませんでした。しかし、APSARA 職員の方々は常に私たちに伝えようという意思をもって説明してくれました。私がなかなか理解できず何度か聞き返したときには根気よく教えてくれ、言葉だけじゃ伝わりづらいときには地図や絵を用いて説明してくれました (写真 1)。このような暖かい APSARA 職員の方々のおかげで、分からないことを曖昧にせず質問もしやすい環境でより充実した時間を過ごせたのだと思います。

APSARA 職員の方々が熱心に教えてくれたことの一つが、アンコール遺跡を取り巻く水環境についてです。遺跡には東西南北4つの「バライ」という人口貯水池があります。なかでも一番大きな西バライは、大きさが南北方向に 2.2 km、東西方向に 8 km の長方形で貯水量は約 5,600,000 m³です。実際に見てみるとまるで海や湖のようで、人力で作られたものには全く見えませんでした (写真 2)。

西バライの役割は洪水を防ぐこと、人々への水の供給、灌漑、観光資源、地盤強化と多岐に及びます。その中でも私は水と地盤強化の結びつきが理解できませんでした。水は地盤を緩めるようなイメージがあったからです。APSARA 職員の方によると、アンコールの寺院の地盤は砂から成り、砂は水を含むと強くなるそうです。砂浜を歩くと足が徐々に沈んでいきます。寺院がそのような状態にならないように、水の供給が欠か

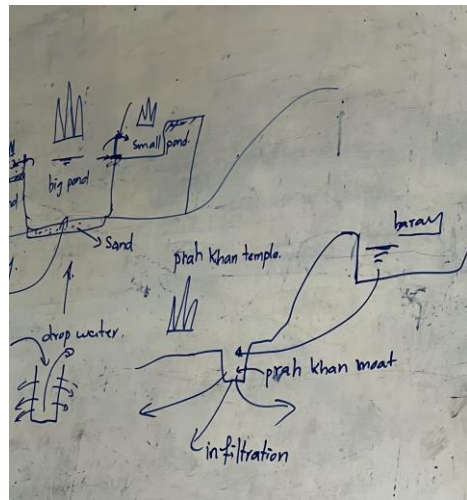


写真 1. 担当職員の説明.



写真 2. 西バライ.

せないそうです。このバライは二代の王によって50年という長い歳月をかけ完成しました。昔の人にとってもバライはなくてはならないものであったことが分かります。

バライの中心には「メボン」という寺院があり、現在修復作業が行われています（写真3）。今回私たちはボートに乗ってメボンへ向かい、その現場を見学することができました。メボンでは約150人が働いています。寺院の古い石は水分がなくなると落ちてくるため、新しい石を元あった場所に置き換えて補填し、修復しているそうです。また、メボンの中央には井戸があり、波の影響を受けずにバライの正確な水位を測ることができます。今も昔も重要な役割を担うメボンを後世に伝えるべく、毎年小学生に教える機会を作っているそうです。



写真3. 修復中のメボン.

次に、現地での生活についてです。カンボジアでの生活は私にたくさんの刺激を与えてくれました。美しい遺跡、街を走るたくさんのバイク、日本とは全く異なる交通ルール、豊かな自然など、挙げていけば数え切れないほどあります。すべてが私にとって新しく、珍しいものでした。私は国際系の学部に所属しているので外国の文化の多様性について学んではいましたが、やはり自分で実際に体験することと、遠くの人の暮らしとして知るとでは大きな違いがありました。

私が特に面白いと感じたのは値段交渉の文化です。マーケットやトゥクトゥクなどでは観光客向けに価格が高めに設定されているので値切りが必須です。先生方からは「買いたい値段の半額から言っても大丈夫」、「自分の言った値段で了承が得られたら必ず買わなければならない」と教えていただき、私たちも値引きにチャレンジしてみました。最初は値段交渉になかなか慣れず、店員さんに押され気味だったのですが、



写真4. 35ドルから10ドルの値切りに成功.

日を追うごとにお得に買い物ができるようになっていきました。メンバーの1人は元値35ドルの絵画を10ドルまで値切ること成功していました（写真4）。日本では基本的に売り手が商品の価格を決めるので最初はこのシステムに戸惑いましたが、売り手と買い手が納得できる仕組みになっているのが良いと思いました。値段交渉を通して現地の方とコミュニケーションをとるきっかけにもなり、思い出の一部にもなりました。買った商品により付加価値がつき、愛着が湧いています。

インターンシップを通して感じたことは、カンボジアは日本より経済的に豊かなわけではないが、人と人の関係性や人間性が豊かだということです。ロヴィア村という村を訪れた際、私は村の人たちが見ず知らずの私たちを温かく迎えてくれたことにとても驚きました。すれ違う時や話すときに当たり前のように笑いかけてくれ、小学校の子どもたちは私たちに向けて手でハートを作ってくれました(写真

5)。家と家の距離が近く、村全体の人々がお互い家族のように助け合い安心して頼れるコミュニティができあがっているからこそ、人々の心に余裕があるように感じます。日本の場合、見知らぬ人がきて温かくむかえることはあまりありません。経済的に余裕がある暮らしをしていても、家族と一緒に暮らせていなかったり、家族と暮らしていても孤立感を抱える子どもがいたりします。経済的豊かさとは生きていくう



写真5. ハートポーズでコミュニケーション。

えでももちろん必要なことですが、それだけで100%幸せとは言えません。心の豊かさこそ多感な私たちに必要です。有名企業に就職することや安定がすべてだと言われる風潮の中で、忘れてしまいそうになる大切なことを改めてカンボジアで学びました。

最後に、この2週間安全に業務に取り組めたのは、塚脇先生、木村先生、荒木先生、APSARA職員の方々、運転手のダリスさん、5人のメンバー、関わってくださっている全ての方々のおかげです。心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

3) 初めての東南アジア カンボジアでの学び

公立小松大学国際文化交流学部 3年 相原音々花 (グループ 2)

私はカンボジアでのインターンシップに参加しようと思ったきっかけが二つあります。一つ目は将来的に英語を使って仕事をしていきたいという夢があったからです。二つ目はカンボジアやその他周辺の東南アジアでは子供が物乞いをしている光景が当たり前ということを知り、一つ目の英語を使う仕事をする傍ら、貧困に悩む子どもの生活を支える仕事をしたいと考えていたためその実態を確かめたいという思いがありました。

今回のインターンシップでは、有り難くも、すべてのバライを訪れることができました。その中でも印象に残ったものとして東バライがあります。まず、バライとは真ん中に寺がある貯水池のことを指します。Dyke (ダイク) と呼ばれる堤防をつくり、水を溜め、そしてその水は真ん中の寺の地盤を強化する役割を持つ他、生活用の水を供給したり、たくさんの雨が降る雨季の際の洪水を防止したり、また観光の景観にも利用されます。とにかく、「バライの水」というのはカンボジアの人たちからすると、無くてはならないものとなっています。ところが私たちが訪れた東バライは、本来、水がなくてはならない場所に水はなく、代わりに人々が生活する住居がたくさんありました。東バライに行く前には当然、事前にそのような知識は得ていましたが、実際東バライに向かう際にはドライバーの方が「ここが東バライだよ」と言われるまでは東バライの中にいることが気づかないぐらいでした。

バライは東西南北に存在していますが、私が紹介している東バライ、そして南バライ、この二つには水がありません。職員の方の話を聞くと、昔は水がありましたが時が経つにつれ水は次第に干上がってなくなったそうです。ダイクもメンテナンスされず、人々が家を作るための材料として使い、破壊されていきました。職員の方いわく、水を再び満たす前にダイクの修理をしなければならぬとのことでした。しかし、ダイクを修理できても、バライの中には村がまだ残っているため水を入れることができないとおっしゃっていました。また、その村の人たちが移住しても、移住先のインフラが大変、と色々な面を考慮していましたが、相当悩まれているように感じました。

しかし、東バライは南北に 1.7 km、東西に 7.2 km あるため、バライの中では 2 番目に大きいものとなります。生活の面から見ても東バライの水があれば、今よりも余裕を持って生活ができるようになる上に、先ほど観光の話をしました。北バライに観光が集中してしまっているという点においても問題解決につながるのではないかという話が出ました。私たちは東バライにある東メボンには訪れることはできませんでしたが、他のメボン同様、その周りに水があったならば当然、綺麗なものであると感じますし、その景観目当てで行く観光客も出てきて、観光分散にもつながるだろうと思いました。

先ほども述べたように、バライはダイクという堤防がなければ成り立ちません。しかし、カンボジアの人々は家を作るためにダイクを削り家を建てます。別のバライに行った際に

も職員の方が「ここに住んでいる人はバライの大切さを知らない」とおっしゃっていました。バライの大切さを伝えるためにも、もしかしたら実践しているかもしれませんが、学校での教育でバライの知識を教えることが、効率よくカンボジアに住んでいる人々に伝える方法なのではないかと思いました。

カンボジアでの生活はとても新鮮なものでした。私は好き嫌いがあまりなく、嫌いなものでも食べられるレベルなのですが、正直行く前まではココナッツはあまり得意ではありませんでした。カンボジアではそこから中にココナッツが植えてあり、飲食店に行くと必ずと言って良いほどココナッツがあります。注文すると、ココナッツにそのままストローがささった状態で出てきます。初めて見た時にはその大きさに「でかつ」と声が出てしまうほどでした（写真1）。しかし、西メボンに行った際に職員の方から頂いたココナッツがとても甘く、美味しく量がかなりあったのに一瞬で飲み干せてしまったのはかなり印象に残っています。西メボンは日照りもすごく、体感はずっとより高く感じました。



写真1. 行きつけのお店で。

そんな中、キンキンに冷えたココナッツは最高で今まで飲んだココナッツの中で一番美味しかったです。カンボジアのレモングラスという食べ物も美味しかったです。スープなどに入っていたのですが、日本ではあまり味わうことがない独特な風味と、すっきりした健康的な感じがとても好みでした。

このようにカンボジアでの食事は日本では食べられないようなものを食べることを意識していたので自分的にはかなり挑戦的でした。カエルは食べられると知っていましたが、自分がまさか食べる日が来るとは思っていなかったもので、「鶏肉だ」と自分に暗示をかけ思いっきり口に運ぶと、本当に鶏肉で度肝を抜かれました（写真2）。しかし、有精卵の卵で生まれる直前の卵を食べる習慣もあると聞いていましたが流石に躊躇してしまったので次回、カンボジアに言った際には挑戦してみようと思います。



写真2. カエルの脚を揚げたもの。

生活面に関しては虫がたくさん出ること以外は、私たちがよく気にするトイレなどは問題なく過ごせました。カンボジアにはトッケイというヤモリがいるのですが「トッケイ」という鳴き声が特徴的で7回以上聞くと幸運になると言われています。私とホテルで隣の部

屋だったインターンシップの仲間は同じ 1 階で寝泊まりしていたためホテル周辺の音がよく聞こえます。その日もいつも通り寝ていると突然「トッケイ」と聞こえてきたので何回聞こえるか数えると 7 回どころか 10 回以上鳴いていました。朝起きて隣の仲間と合流するとすぐに「今日トッケイ鳴っていたよね!？」と口を揃えて言っていたのが懐かしいです。それも連日聞こえたので、仲間と確認するのも一つの楽しみになりました。

さて、カンボジアに行く前に私はきっかけが二つあると述べました。まず、一つ目の海外で働きたいという夢のことですが、カンボジアで色々体験して、より夢を現実的に考えられるようになったと思います。もし、大学卒業と同時に海外に行って働くことができて、文化の違いから、働き方の違いまで色んな壁に立ち向かうことが想定されますが、まずは言語の壁にぶつかるなど感じました。今回は職員の方が何度もゆっくりと説明してくれましたが、実際はそうともいきません。ましてや専門用語などが出てくるとより難しくなります。ですから、まず海外に支社がある日本の会社でキャリアを積み、後にその会社から海外に行くという形がいいのではないかという考えに至りました。自分としては将来がより具体的になったと感じられる良いきっかけでした。

二つ目は東南アジアにおいて子どもの物乞いが多いといったことに関してですが、確かに自分自身でも多いと感じることがたくさんありました。私たちが夜、夕飯を食べていると、一見どこにでもいる子どもが私たちのところに近づき「one dollar」と手を差し出してきてお金を求めてきます。こんなに小さい子が夜、一人でお金を求めて私たちの元にやってくることに最初は可哀想だと思い、自分の財布に手を伸ばそうとしてしまいました。しかし、インターンシップと一緒に来ていた仲間が「その子のためにならないよ」と助言をしてくれて我に帰りました。与えることは場合によってはその子のためにはならないのだとわかって、何もしてあげることができないのがとても辛かったです。しかし、カンボジアだけでなく、日本でも表面上では貧困に気づけなくとも、そのように生活に苦しんでいる子はたくさんいると思います。カンボジアでそのようなことに気づけた今、私にも子どもたちにできることは日本でもたくさんあるのではないかと思います。



写真 3. アンコールトムのタケオ門。

このように、カンボジアでのインターンシップは私の将来をも左右させられる良いきっかけになったと感じていますし、21 年間生きていてもなお、体験することがないことがこれほどたくさんあるものだとしみじみ思いました。そして、金沢大学、公立小松大学から共に参加した私を除き、他 5 名のメンバーにはとても支えられていたと感じます。体調を崩した時には薬をもらったり、行く前は少々不安だった気持ちを忘れさせるくらい楽しい時

間をメンバーは与えてくれました（写真3）。先生方には、2週間、何から何までサポートしていただきました。また普段、学校では見せることがない先生の一面を見ることができて、他のメンバーも心を打ち解け、みんなで行くご飯や休日も全力で楽しむことができたりと、先生方は私たちのために色々と気を使ってくださりました。改めて、2週間共にしたメンバー、先生方、そして職員の皆さんには心より感謝します。

ありがとうございます！オーケンチュラン！

4) インターンシップを終えて

金沢大学人間社会学域地域創造学類 3年 佐藤さや花 (グループ 2)

9月4日～9月17日までの約2週間、2023年度アンコール世界遺産インターンシップに参加した。私がこのプログラムに参加した理由は主に二つある。一つ目はインターンシップの業務地であるアンコール世界遺産が、世界でも数少ない「区域内に人が生活する世界遺産」だということである。私は自然や文化遺産に興味関心があり、大学内外で関連した内容の学びや体験をしている。その中でも人の生活と保護又は保全すべき対象が共存している場合の様々な障壁や課題について、全国各地・世界各国の現場を見たいという思いがあったため、アンコール世界遺産は最適な訪問地であった。二つ目は、熱帯気候の植生をこの目で観察したいという思いがあったことである。自分自身の興味関心から、世界各地の植物を見たいと思っており、日本ではほとんど見られないような熱帯に生息する植物や、その生息環境を見て回りたいという希望があったことも参加した理由の一つである。

まず初めに、遺跡の区域内での植樹体験について紹介する。遺跡内では、密度の高い森林、風通しの良さそうな若木の並木、白い幹肌が目立つユーカリの群生というように、場所によって緑環境は大きく異なっている。外来種であるユーカリは以前植樹されたものだが、ユーカリの生態を理由として土壌環境等が悪化することから、現在は在来の別の種の植樹が進んでいるようだ。植樹を行ったアンコール・ワットの近隣には植樹された若木が多く並び、このインターンシップに過去参加された先輩方が植えた個体もあった。我々の植樹には、遺跡内各地で景観美化に従事する様子が見られる、緑色のTシャツを来た職員さんにサポートして頂いた。工程は極めて容易にできるよう配慮されており、あらかじめ掘られた穴に *Pterocarpus indicus* (英語名: Leguminosae) の苗木を置いて、土を被せた後水をやれば完了である。僅かではあるが、遺跡の景観を作る経過に自分の手が加わっているという、とても貴重な経験ができた (写真1)。



写真1. アンコール・ワットでの植樹。

植樹に関する話題で私が一番驚いたことは、アンコール王朝時代、つまりアンコール遺跡が遺跡でなかった当時には、敵が侵入した際身を隠して搜索が困難になることを防ぐために、現在のように木が覆い茂る環境ではなかった可能性がある、ということである。私にとっては遺跡が深い森林に覆われた姿が非常に印象的であり、毎朝の出勤で街中から林内に入る瞬間は自分が遺跡の世界観に包まれたと感じさせるものであったし、別日に訪れたタ・プローム寺院などはまさに、寺院の建築を今にも取り込んでしまいそうな巨木が見どこ

ろであったりもする。今回の植樹活動はアンコール王朝時代を再現するものではなく、王朝が忘れられて遺跡として発見されるまでの長い時間を経た遺跡景観を保全するための活動であることが分かる。

このことから私が気づいたことは、世界文化遺産として保護される対象であってもその方針は一つではなく、どの時点での状態を是として保護するかは判断する立場の人間によって変動する可能性を有するという点である。これはアンコール遺跡の建築物にも見受けられ、鉄骨や新しい素材を用いて修復された安全性と整然とした姿が特徴の遺跡もあれば、崩れた当時の石材の積み直しや最小限度の修復に留めた遺跡もあった。このような景観を含めた修復による対象物の変化は日本における城郭等でもみられるが、アンコール遺跡ほどの知名度と規模を持つ世界遺産でも類似したものがみられるということは新たな知見であった。特にアンコール遺跡では、修復作業に多くの国が参画していることの影響が大きいのだろうと推測する。

いずれにしても個人的には、修復の前後の変化において対象物の本質が大きく変わらないことが望ましいと現時点では考えたのだが、それがいつの時代の誰にとってのものなのかという点でさらに考察する必要性を感じた。また、景観全体と建築物それぞれでも異なる視点が必要なのかという点についても考えてみたいと思う。今後も様々な土地の遺産・遺跡を直接見て知見を広げていきたいと考えている。

植樹を終えた後、育苗地を訪れ苗木を植えるポットに土を入れる作業の体験と、育苗地の説明を受けた。ここでの最大の印象は、幼い子供を連れた若い女性を含む、女性が多く働いていたことである。カンボジアに到着してから、遺跡やマーケット等様々な場所で働く人々を観察していたが、アプサラ公団、遺跡ガイド、トゥクトゥクの運転手には男性が多く、マーケット、育苗地、遺跡の景観美化、トン



写真 2. 育苗地でのポット土詰め作業.

レサップ湖の水上観光では女性が多く、ホテル、飲食店、屋台以外のカフェでは半々くらい、という印象であった。専門的な知識が必要なアプサラ公団や力仕事には男性が多いこと、女性は多くの場合幼い子供を連れて仕事をしていることが印象的であった。これは表面的に見た感想のみで彼らの生活形態がどのようなものなのか深く理解したわけではないのだが、今後教育が広く普及し、多くの女性が専門的な知識を活かして活躍する選択肢を持てるようになれば良いと思った（写真 2）。

育苗地訪問の後、遺跡に程近い場所にあるアンコール植物公園を訪れた。この植物公園は 2022 年 5 月に拡大造成され開園した新しいもので、15 ヘクタールの敷地に 500 種以上の植物や数万本の樹木が生育している。園内では薬用植物が見どころのスパイスガーデン・ハーブガーデンや、野生生物の庭、クメールの庭などゾーンごとに熱帯の多様な植物を楽しむことができる。ガイドさんや埼玉大学の荒木祐二先生に説明を受けながら、初めて出会う沢山の種を観察しとても充実した時間になった。だが、まだ新しい植物園だということも多くの可能性を持ち合わせた場所だということも感じた。その一つとして、植物の魅せ方が挙げられる。現地の人々にとっては見慣れた生物であるバナナやヤシ、鮮やかな花々とそこに集うこれまた鮮やかなチョウは、異なる気候で生まれ育った人に驚きと感動を与えるものである。だが、現地ではそれらに対する説明書きや名前の札さえついていないものが多かった。

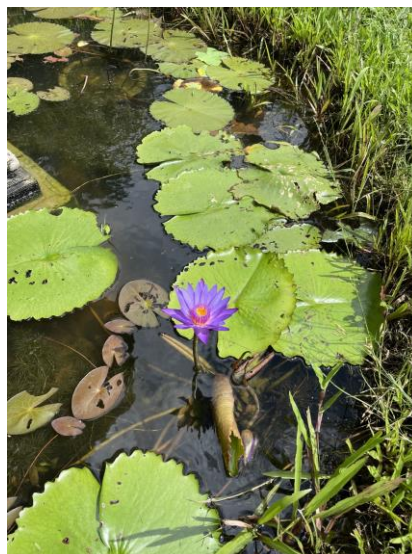


写真 3. 熱帯性のスイレン。

アンコール遺跡の魅力はクメール王朝の建築や利水治水の技術以外にも、熱帯モンスーン気候由来の平野部らしい特徴を持った自然環境が挙げられる。カンボジアには山地、平野、湖、海と多様な環境条件があるが、その中でも平野部の環境は人の生活と密接に関わりを持ち開発され尽くす脆弱性を持ち合わせている。今後も人口が増加し急速に開発が進んでいく中で、現地の人々も世界も、このカンボジアの自然の素晴らしさと貴重さを忘れてしまうというのはどうも寂しいものであるし、どこかで人々の生活に影響が出てくるのが予想できる。そうならない為にも、アンコール植物公園は既に持ち合わせている財産を内外に魅せる場、そして保全の第一線であってほしいと思う。そのためには現場の従事者や子供たちへの教育が必要になる。将来的には有名な遺跡を目的に来たたくさんの観光客や地元の方々までもが植物公園を訪れ、自然環境にも目を向ける人口が増えていくことが期待される。少なくとも、すでに開発が隔々に行き渡った日本で、利便性と減災機能を楽しみ、時にその弊害を感じて育った私の目にはこのように映った。こう映るほど実に豊かで、羨むほど魅力的な場所であったのである（写真 3, 4, 5）。



写真 4. バナナの花。

約 2 週間のカンボジア生活は、非常にストレスフリーで学びの多いものであった。お店やトゥクトゥクで接する方々は見返りを求めない笑顔と愛嬌のある姿がとても印象的で、毎度温かい気持ちになることができた。毎日の食事もカンボジア伝統料理や他文化圏の料理まで、幅広い種類の美味しい料理を楽しむことができた。共にインターンシップに取り組んだ仲間は、初日から温かく接してくれたのと同時に、英語力が乏しいのにも関わらず質問したがりで私を何度も助けてくれた。

そして何より、出国から帰国までこれ以上安全な手段はないと思うような綿密な計画作りと日々のサポート、そしてカンボジアやその他について非常に興味深いお話をしてくださった塚脇先生、木村先生、荒木先生に深謝の意を表す。海外経験として、これ以上ない充実した時間になったことを噛みしめると共に、経験を自らの将来に繋げる努力を続けていきたいと考えている。



写真 5. スジグロカバマダラ.

5) カンボジアで学んだ大切なこと

公立小松大学国際文化交流学部 2年 宮下千佳 (グループ1)

9月4日から9月17日にかけて、2023年度アンコール遺跡整備公団のインターンシッププログラムに参加した。私がこのプログラムに参加しようと考えた理由は二つある。一つ目は、以前から世界遺産に興味があり、いつか必ず訪れてみたいと思っていたアンコール世界遺産に関わるプログラムであったということである。二つ目は、カンボジアという国が実際はどのような国なのか、カンボジアに住む人々にとっての幸せとは何なのかということ、自分の目で見て知りたかったからである。このプログラムに参加する前の私は、貧しい、暑い、そして少し危険そうだという負のイメージを多く持っていた。自分の祖父母や両親など周囲の人のほとんどが私と同じようなイメージを抱えていたが、実際にカンボジアに行ってみて「良い意味で裏切られた！」というのが今の感想である。

このプログラムでお世話になったアプサラ公団はアンコール世界遺産やその周辺の自然環境の管理を行っている機関で、私たちは水資源や森林、インフラ整備を担当している部門で業務を行った。今回業務に参加して、アンコール遺跡と周辺に住む人々にとって、水資源とその管理がいかに重要なものであるかを学ぶことができた。貯水池の役割を果たしている「バライ」は、水の供給や観光において大きな役割を果たしている。アプサラ公団では、バライの堤防の整備や天候や季節によって水の供給量の調整などを行っていて、調整を行うことでシムリアップに住む人々の生活用水や灌漑に使われる水を適切に供給することができる。地下水は遺跡の基盤を安定させる役割もあり、アンコール世界遺産があるシムリアップでは水の供給が必要不可欠である。

また、業務と休日の観光とを通してカンボジアでの人々の生活や文化にたくさん触れることができた。ここからはカンボジアの伝統的な村と住宅について紹介する。

私たちは業務で「ロヴィア村」というカンボジアの伝統的な様式の村を訪れた。この村は上空から見ると円のような形をしていた。カンボジアでは精霊崇拝の文化が根強く残っており、木の中に精霊が宿っていると信じられている。この村でも家を建てる際に木を切る必要があるときは、精霊を一か所に集める儀式を行わないと木を切ることができないそうだ。村の人々の多くは農業に従事しており、村の周辺には水田が広がっていた。また業務期間中、村の中や道中で農業に使われる牛を数多く目にした。

村では、バナナと米で作られた伝統的なお菓子を作る様子を見学したり、学校へ行



写真1. 伝統的なお菓子を作る女性。

って子供たちの授業風景を見たりすることができた（写真 1）。村の中に建てられている住宅は高床式住居で、日光を遮ることができる床下の部分では食べ物を調理したり、魚を捕まえるためのかごを編んだり、吊るされているハンモックでくつろいだりしている人もいた。

村を訪れた後、伝統的な住宅について学んだ。先に述べたようにカンボジアの伝統的な民家は、東南アジア独特の気候による湿気や暑さを避けるため高床式住居になっている。雨季には降水量が多くなるため洪水のような被害を防ぐことにもつながる。また、階段を上ると二階部分の入り口には踊り場のような場所があり、来客があった際にそこに座って話をする玄関のような役割をしている。屋根はあるものの壁や扉がなく直接外に面しているため風が心地よかった。

カンボジアの伝統的な村には「パゴダ」と呼ばれる寺のような建物があり、壁には仏陀の生涯が描かれていた。現在のロヴィア村には性別関係なしに通うことができる学校が存在しているが、かつてはこのパゴダが男の子にとっての学校であり病院でもあった。女の子は教育を受けず、家で母親から家事を習うのが昔のあたりまえだった。私たちが見学した学校ではちょうど授業が行われており、男の子も女の子も元気に手をあげたり大きな声で発表したりしていたのが印象的だった（写真 2）。



写真 2. 授業を受ける子供たち。

村をひと通り見学した後、公団の職員の方と少し話す時間がありそこでお互いの国の宗教観について話した。私は、日本では宗教を重視している若者が多くないこと、クリスマスやハロウィーン、バレンタインデーなど自分の信仰に関係なくイベントを楽しむ人が多いことなどを話した。一方、カンボジアでも若者が仏教をあまり重要視しなくなってきたこと、それによって寺への興味関心が薄れていること、都会ではカンボジアの若者も日本のようにクリスマスやバレンタインデーを楽しんでいるということを知った。しかし、世界遺産を守る立場にある彼らは若者の仏教や寺への関心が薄れているため、将来、寺や遺跡の保護が十分になされないのではないかと懸念していた。彼らは若者にその重要性を伝えるために定期的に学校を訪れて子供たちに向けた講演会を開いているそうだ。

業務を通してアンコールワットを含めたくさんの遺跡を見学したが、見るたびにその迫力と技術に圧倒された。現代には様々な運搬手段や石を削る機械など便利な道具が存在しているが、そういった道具がない時代に人間が大きく重たい石を運び、それを高いところまで積み上げ、繊細な彫刻を施したという事実はとても信じがたいことで、私たちが想像もできないことである。アンコール遺跡群が世界遺産に登録されて以来、世界中の観光客の人気の観光スポットとなっているが、国内の若者たちへアンコール世界遺産の素晴らしさや歴史を伝え続け、これからも大切に保護されていくことを願いたい。

2週間のカンボジア滞在を通して、カンボジアと日本の違いについていくつか気づくことができた。例えば、主な交通手段の違いである。日本では街中にたくさんの車が走っているがカンボジアの道でよく目にするのはバイクに乗った人たちであった。朝の通勤時間には道を行きかうバイクをたくさん目にした。私たちも何度か職員の方が運転するバイクの後ろに乗って業務に向かった。日本でバイクに乗った経験がなかったため、業務中にバイクに乗ることがあるという話を聞いたときは不安だったが、すぐに慣れていつの間にか乗ることが楽しみになっていた。バライや遺跡に向かう森林の中を通るとき、木陰の中を走っていくのが心地よくて最高の時間だった。

もう一つ、私がカンボジアで印象的だったのは、子供や若者の多さである。街を歩いていると明らかに日本より子供の数が多いことがわかるくらい子供を目にし、職員の方からカンボジアの平均年齢が20歳代であるという話を聞いて驚いた。マーケットに行くと店番をしている母親を見て子供が物を売る真似をしていて、ほほえましい光景を見ることができた。しかし、街の中には物乞いをする子供もいるのが現状で、私たちもご飯を食べているときに何度か声をかけられて胸が苦しくなった。

今回、業務以外の時間にもカンボジアに住んでいる人とたくさん交流することができた。私が一番印象に残っているのは、休日に訪れたトンレサップ湖での交流である。トンレサップ湖は東南アジア最大の湖で、雨季と乾季の間で面積や水深が大きく変化する。私たちが訪れた9月は雨季であるため、湖の水量が多く水上の高床住居で住民が生活している状態だった（写真3）。私たちがボートに乗って民家の前を通り過ぎると外を眺めていた住民たちが手を振ってくれた。中にはボートが見えなくなるまで手を振り続けてくれる子供もいて、あたたかい気持ちになった。



写真3. トンレサップ湖の民家。

水上レストランには、トンレサップ湖に住む女性たちが漕いでくれるボートに乗る体験ができた。私が乗ったボートには漕ぎ手の女性と彼女の子供である小さな男の子が乗っていた。彼は私たちを見て最初



写真4. ボートで子供とふれあう。

は少し警戒している様子だったが徐々に心を開いてくれて最終的には一緒に遊ぶことができた。ボートに乗っているとき、英語で会話する中で彼女たちの生活や家族のこと、トンレサップ湖にいる生き物について知ることができた。男の子とは言葉は通じなかったがお互

いにジェスチャーや表情，オノマトペを使って意思疎通を図った（写真 4）。ボートに乗って回った場所には水の中から生えている木がたくさんあり，幻想的な美しい景色を楽しむことができた。休日や業務後に何度も訪れたマーケットでも値段交渉をしたり，仲良くなって顔を覚えてもらったりしてたくさんの人と交流した。英語で会話したり交渉したりする自信がなかった私は初めての買い物をするとき少し不安だったが，慣れてくるとお店の人とのやりとりが楽しくなり自分から話しかけられるようになった。

インターンシップ期間を通して，様々な人とたくさん交流することができた。英語で話すことにあまり自信がなく，出発前に不安に思っていた私が自ら話しかけたり質問したりできるようになったことが，この期間で一番成長できた部分なのではないかと思う。また，言葉が通じなくても私たちは意思疎通することができるということ，たくさんの人との交流を通して身をもって実感することができた。カンボジアの人たちは，大人も子供も目が合うと微笑みかけてくれるのが印象的で，親切な人がとても多かった。そして，人と人との繋がりが幸せを生むのだということにも気づかされた。

カンボジアは日本に比べればまだまだ技術的に発展していない部分も多いが，発展していることは，幸せであるかどうかにはあまり関係がないのではないだろうか。実際，日本にいるときに比べて時間がゆっくり流れていくように感じたり，人と関わるが多かったり，自然に触れる機会が多かったりと，日本とは違う「豊かさ」があると感じた。滞在期間中，現地で働いている日本人にも出会うことができ，領事館で働いている方，市場の一角や通りでお店を営んでいる方など様々であったが，共通しているのはみんなが生き生きしていることであった。

カンボジアに約 2 週間滞在してみて，人のあたたかさにたくさん触れることができたし，自然が生み出す美しい景色も見ることができた。おいしい食べ物をたくさん食べたり，先輩方と一緒にマーケットでの買い物を楽しんだり，面白いマッサージ師さんのいるお店でマッサージを受けたりと滞在を満喫することができた。カンボジアを訪れる前は想像してい



写真 5. インターンシップ最終日。

なかつたくらいに私はカンボジアという国が大好きになったし，正直日本に帰国するのが寂しいとも思えるほどだった（写真 5）。今回の経験が大学生のうちにできたことは間違いなく私の人生において大きな財産となるだろう。

最後に，今回出発前から帰国後までインターンシッププログラム全体を通して丁寧な指導，サポートをしてくださった先生方，業務を通して明るく気さくに接してくださったアプサラ公団の職員の皆様，毎日優しく声をかけてくださった先輩方に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

6) アプサラ公団でのインターンシップを終えて

公立小松大学国際文化交流学部 4年 坪内美南 (グループ 1)

まず初めに、2週間のインターンシップに携わってくださった塚脇先生、木村先生をはじめとする大学関係者の方々、アプサラ公団の職員の皆様、共に過ごした5名の学生に感謝を述べたいと思います。本当にありがとうございました。カンボジアという土地で、他の短期留学とはまた異なる、とても素敵な思い出を作ることができました(写真1)。この報告の内容は、まず志望動機、自身の目標、インターンシップでの業務、ルンタエク・エコビレッジでの業務、そして休日の過ごし方です。



写真1. アンコールワット。

志望動機の一つ目は、大学1年生の頃に大学の広報でこのインターンシップの存在を知り、参加してみたいと考えたためです。カンボジアや世界遺産に関してまだ何も知識のない状態でしたが、海外に行ってみたい、人が暮らしている世界遺産というものを実際に見てみたいという安直な思いがあり、参加を希望しました。動機の一つ目は、授業が少ない文系4年生の大学生活をより充実したものにしたいと考えたためです。余裕のあるこの時期を無駄にしたくないと思い、学内のイベント補助や資格勉強などに励んでいましたが、自身の専攻分野である英語や中国語の学びも大切にしたいと考えていました。本インターンシップの説明会に参加し、英語を使ったコミュニケーションの場が毎日のように設けられるということを知り、ますます参加したいと思うようになりました。

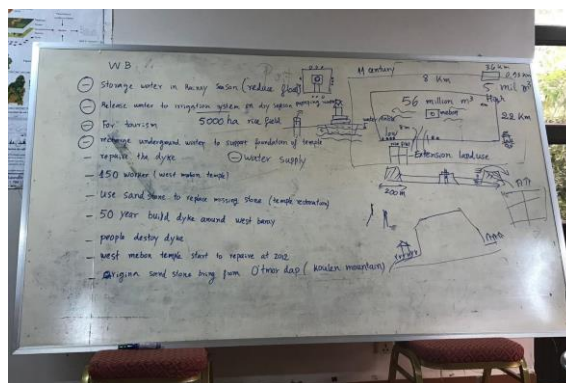


写真2. 担当職員の方から仕事を教わる。

次に、自身の目標の一つ目は英語で公団の方々とコミュニケーションをとり、自身の英語力を向上させることです。アメリカの短期留学やTOEIC以来、ほぼ独学でしか勉強していないという恐ろしい状態で参加しましたが、単語がわからなければ調べる、言葉で表現できなければイラストやジェスチャーを駆使するといった方法で2週間を乗り切りました。ただし、遺跡関連の単語には聞いたことすらもないもの(例えば dyke)も多かったため、事前学習の大切さを感じました。目標であった英語力の向上という点では微妙な部分が多いですが、それ以上に相手とコミュニケーシ

ョンを取りたいと思う気持ち、勇気や諦めずに追求する気持ちが大切だなと感じた日々でした（写真2）。

目標の二つ目は、世界遺産への理解を深めることです。そもそもカンボジア＝アンコールワットという幼稚な発想しかなかった私には、アンコールワット以外にも様々な遺跡があること、バライという人工の貯水地がカンボジアの人々の生活にいかに重要な役割を果たしているかすら知りませんでした。しかし、実際にインターンシップに参加し、アンコールワット周辺の遺跡群は勿論のこと、バライや周辺の農村、急激な観光化によって発生した問題などに関しても、アプサラ公団の方々の正確で丁寧な説明とともに理解する事ができ、本当に貴重な経験になったと思っています（写真3）。



写真3. 修復工事中のメボン.

そして、目標の三つ目はリーダーとして責任のある行動をすることです。今回は3年ぶりのインターンシップだったこともあり、チューターの方がおらず、学生間のリーダーを務めさせていただきました。学生間の連絡をこまめに取ること、先生方への報連相を常に意識して行動していたためか、この2週間常に自分の行動に責任を持って動くことが出来たように感じます。また常に意識していたこととして、「笑顔・低姿勢・正しく怖がる」の3つを大切にしていました。以前、木村先生が説明会の際に「正しく怖がることが大切」と話されていて、今回のインターンシップでその意味がよくわかったような気がします。カンボジアでの生活は新しいものや珍しいもので溢れていてとても魅力的でしたが、道を塞がれる、手を掴まれそうになる等の強引すぎるマーケットでの勧誘や、食事中に片脚のない物乞いが背後にいたりなどと身の危険を感じることも多少ありました。



写真4. アンコール植物公園で.

インターンシップ期間中、午前中は主にフィールドワーク、午後は公団のオフィスに戻ってフィードバックをしていました。今回はグループごとに分かれることは特になく、アプサラ公団の方々と共にアンコールワットやアンコールトム、タ・プローム、バライ、ルンタエク・エコビレッジなど様々な場所を巡り、建築構造や人々の暮らし、水の管理方法などを学びました。午後のフィードバックではその日に学んだ内容を復習し、整理した上で不明な事や気になる事を質問していました。毎日のフィードバックによって、更に知識を深め、複雑な情報をも整理することができたと感じています。

また、植樹や植物公園への訪問といった業務もあり、アンコール遺跡郡付近での植林に力を入れている理由やカンボジアで育つ植物の特徴などを教えていただきました（写真4）。

業務地のひとつルンタエク・エコビレッジは、アンコール地域の余剰人口を移すために作られた新しい村のことです。移動した住民の生活を支えるため、カンボジア政府によって家や土地が無償で提供されています。村の収入源は主に農業であり、レモングラスやじゃがいも、バナナ、とうもろこしなどが栽培されています。とうもろこしを昼食の際に頂きましたが、程よい甘みがあってとても美味しかったです。また農業に使われている肥料についても、バイオチャー（お米の籾殻のようなもの）を落ち葉や牛の糞と混ぜて肥料にしており、環境に優しく、村内で何度も再利用できる優れたものだとお聞きしました。また村には学校があり、新しく清潔で、バスケットボールができるようなコートもありました。村を訪れる前は貧しく、取り急ぎ準備されたような居心地の悪い村なのではないかと思っていましたが、実際には学校や井戸、寺院、居住施設等が驚くほどに完備されており、カンボジア政府が余剰人口問題を真摯に受け止め、本気で解決しようと取り組んでいるのだなと感じました（写真5）。



写真5. ルンタエクで実際に使われている肥料。

しかし、ルンタエク・エコビレッジの問題点として、シェムリアップ中心街からかなりの距離があることやアンコール地域に住む住民が土地を手放そうとしない、収入への不安があるため移住したがる点などが挙げられます。特に私は市街地との距離の問題が気になりました。フィードバックの際に、アプサラ公団の方に、シェムリアップ中心部などの都市部から離れているために移住が進まず、また、やはり市街に住み直したいと思う住民が出てくるのではないかと尋ねたところ、将来的に村には都市部と同じくらいの施設やマーケットが揃うため、移住は必ず進む、退去したいと思うこともないだろうとおっしゃっていました。しかし、私はこの考え方に少し不安を覚えました。金沢市で私の住む地域もスーパーや学校などの生活動線は整っているものの、駅などの中心部から離れており、生活の便利さや面白さを追求して中心部に出る家庭が多くなっています。ルンタエク・エコビレッジでも今後同じような問題が発生するのでは、と感じました。



写真6. トンレサップ湖にて。

休日は有名なトンレサップ湖を訪れたり、オールドマーケットで買い物をしたりと、とても充実していました。トンレサップ湖では船に乗り、実際に高床式住宅の構造や住民の生活様式などを見ることが出来ました(写真6)。またオールドマーケットは、衣服から食料品、置物やアクセサリーが所狭しと並んでいて、見るだけでも楽しい空間でした。初めはお店の方の迫力がすごくて、「安い」「見てみて」と声をかけられる度にびびっていましたが、初の値切り交渉にも挑戦し、リーズナブルな値段で素敵なお土産を沢山買うことが出来ました。

最後に、本インターンシップに参加し、アンコール遺跡群やバライ、ルンタエク・エコピレッジなどは勿論のこと、カンボジアの食文化や生活様式に関しても多くのことを学ぶことが出来ました。日本では見られない白い牛や水牛、トッケイヤモリやサイチョウなどの動物も沢山いて、常に新鮮さと驚きに溢れた日々でした(写真7)。また、普段は見られないような先生方のはっちゃけた姿を見、明るく優しい5名の学生達と協力しあえた、本当に充実した、楽しい2週間だったと思います。ありがとうございました。



写真7. トッケイヤモリと運命の出会い.

4. 資料

2023 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要

1. 参加者

(1) インターンシップ参加学生

- 坪内 美南（公立小松大学国際文化交流学部 国際文化交流学科 4 年，グループ 1）
- 石川 怜奈（公立小松大学国際文化交流学部 国際文化交流学科 3 年，グループ 1）
- 宮下 千佳（公立小松大学国際文化交流学部 国際文化交流学科 2 年，グループ 1）
- 戸田 すみれ（公立小松大学国際文化交流学部 国際文化交流学科 4 年，グループ 2）
- 相原 音々花（公立小松大学国際文化交流学部 国際文化交流学科 3 年，グループ 2）
- 佐藤 さや花（金沢大学人間社会学域地域創造学類 環境共生コース 3 年，グループ 2）

(2) 連絡教員

- 塚脇 真二（金沢大学環日本海域環境研究センター・教授，9 月 2 日～9 月 20 日）
- 木村 誠（公立小松大学国際文化交流学部・准教授，9 月 4 日～9 月 17 日）

(3) 埼玉大学（9 月 3 日～9 月 13 日）

- 荒木 祐二（教育学部生活創造講座技術分野・准教授）

2. カンボジア側受入機関・責任者

Yit Chandaroat（カンボジア国立アンコール遺跡整備公団・副事務局長，Deputy Director-General, Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap, Cambodia）

4. 全体日程（2023～2024 年）

- 3 月 10 日（金）アンコール遺跡整備公団と受け入れについての打合せ（シエムリアップ）
- 3 月 24 日（金）第 1 回インターンシップ実施委員会（公立小松大学/金沢大学）
- 4 月 10 日（月）インターンシップ説明会（金沢大学）
- 4 月 12 日（水）インターンシップ参加者の募集開始（金沢大学）
- 5 月 11 日（木）インターンシップ説明会・募集開始（公立小松大学）
- 5 月 22 日（月）～31 日（水）インターンシップ応募者 1 次選考（公立小松大学）
- 5 月 22 日（月）インターンシップ参加申し込み〆切（金沢大学）
- 5 月 23 日（火）インターンシップ応募者選考会（金沢大学）
- 5 月 24 日（水）インターンシップ参加者決定・通知（金沢大学）
- 6 月 1 日（木）インターンシップ応募者 2 次選考，参加者決定・通知（公立小松大学）
- 6 月 5 日（月）アンコール遺跡整備公団と受け入れ日程の打合せ（シエムリアップ）
- 6 月 22 日（木）第 2 回インターンシップ実施委員会（公立小松大学/金沢大学）
- 6 月 26 日（月）第 1 回インターンシップ事前研修（金沢大学）

- 7月3日（月）第1回インターンシップ事前研修（公立小松大学）
- 7月27日（木）第2回インターンシップ事前研修（公立小松大学/金沢大学）
- 9月3日（日）アンコール遺跡整備公団との最終打合せ（シェムリアプ）
- 9月4日（月）～9月17日（日）インターンシップ実施期間（※委細は別記）
- 11月8日（水）インターンシップ報告会（金沢大学）
- 1月29日（月）インターンシップ報告会（公立小松大学）
- 2月14日（水）インターンシップ報告書の出版

5. 渡航日程と現地での活動（2023年）

- 9月4日（月）小松/金沢→小松空港（18:30）－JL190便→（19:40）羽田空港
- 9月5日（火）羽田空港（00:45）－JL033便→（05:00）バンコク・スワンナブーム空港（07:55）－PG903便→（09:05）シェムリアプ・アンコール空港，午前：ホテルにチェックイン，滞在準備など，午後：在シェムリアプ領事事務所訪問
- 9月6日（水）午前：アプサラ公団本部でインターンシッププログラム始業式，業務説明と担当者との打合せ，午後：両グループ合同で北バライ貯水池の業務地へ（タ・ソム水門，ニャック・ポアン寺院，プラカーン寺院の見学など），夜：ハン・プゥ事務局長の招待による夕食会
- 9月7日（木）午前：両グループ合同でアンコール・ワット寺院の業務地へ（西参道や第一回廊，中央祠堂などの見学），午後：公団本部で室内業務
- 9月8日（金）午前：両グループ合同で西バライ貯水池の業務地へ（水門，西メボン寺院，植林地，アンコール・トムの西大門などの見学），午後：公団本部で室内業務
- 9月9日（土）午前：全員でコンボンブルック水上村とトンレサップ湖の見学，午後：ロリュオス遺跡の見学
- 9月10日（日）終日自由行動
- 9月11日（月）午前：両グループ合同で東バライ貯水池跡の業務地へ（北東部水門，南部放水路，南西部水門，タ・プローム寺院などの見学），午後：公団本部で室内業務
- 9月12日（火）午前：両グループ合同でアンコール・ワット寺院での記念植樹，バイヨン寺院，タケオ育苗地，タケオ寺院などの見学，午後：アンコール植物公園の見学
- 9月13日（水）午前：両グループ合同で古代集落ロヴィア村の見学，クメールハビタットセンターでクメール伝統建築についての研修，午後：公団本部で伝統建築についての口頭試問
- 9月14日（木）終日：両グループ合同でルンタエク・エコビレッジ訪問（村づくり事業についての研修，農場や水利施設，タニ窯跡博物館），バンテアイ・サムレ寺

院の見学など，午後：公団本部で室内業務

9月15日（金）午前：両グループともに担当職員との業務内容のフィードバック，水
管理部門長ならびに副部門長による口頭試問，午後：自由行動，夜：アンコール
植物公園で終了式，公団関係者らとバーベキューパーティ

9月16日（土）出発まで自由行動，シェムリアップ・アンコール空港（18:20）－VN812
便→（19:40）ホーチミンシティ・タンソンニャット空港（23:20）－JL070 便
（機内泊）→羽田空港（9月17日6:50着）

9月17日（日）羽田空港（9:30）－JL185 便→（10:35）小松空港→小松／金沢

※JL：日本航空，PG：バンコク航空，VN：ベトナム航空

5. 資料

インターンシップでの業務地とおもな訪問地



インターンシップでの業務地（北バライ貯水池，アンコール・ワット寺院，西バライ貯水池，東バライ貯水池跡）とアンコール世界遺産公園内外の学生たちのおもな訪問地（ルンタエク・エコビレッジ，ロヴィア村），およびアプサラ公団本部の位置（Google Maps に加筆）。

2023 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

2023 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

上田長生（金沢大学人間社会学域国際学類 准教授）
木村 誠（公立小松大学国際文化交流学部 准教授）
古泉達矢（金沢大学人間社会学域国際学類 教授）
辻谷友紀（金沢大学人間社会系事務部学生課 専門職員）
塚脇真二（金沢大学環日本海域環境研究センター 教授/
公立小松大学国際交流センター 特任教授）

発行所	公立小松大学国際交流センター 〒923-0921 石川県小松市土居原町 10-10 TEL (0761) 23-6600 FAX (0761) 48-3248
	金沢大学環日本海域環境研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL (076) 264-5455 FAX (076) 264-5468

印刷	2024 年 2 月 13 日
発行	2024 年 2 月 14 日
印刷所	前田印刷株式会社 〒924-0004 石川県白山市旭丘 2-16 TEL (076) 274-2225 FAX (076) 274-5223

